

富山市の遺跡物語®



長岡八町遺跡から出土した土偶頭部

写真は、縄文時代後期後葉～晩期初頭（約3,000年前）の土器とともに谷底近くから出土した土偶の頭部です。（p7参照）

残存長9.5cm、最大幅9.5cmを測ります。頭部から推定される土偶の大きさは約38cm（4頭身と仮定）を測り、北陸最大級の大型土偶といえます。

髪飾りを模したとみられる突起が三か所残り（1箇所は剥落）、耳には孔が開けられ、耳飾を装着した目鼻立ちの整った女性を表現しています。

横から見ると、頭部全体と顔面の間に段差が設けられ、顔面も平滑に磨かれています。耳孔の裏側には浅く短い横線が引かれ、紐を通していた様子が表現されています。どうやら仮面を装着した女性をかたどっているようです。

狩猟・採集の時代である縄文時代の人々は、魔よけや自然界の動植物の繁殖、子孫の繁栄を願い、土偶を作りました。土偶に仮面を装着することによってより一層の呪力を期待したのでしょうか。その土偶をこわし、谷に捨てるによって新たな命の誕生を願う祭祀を行っていたものとみられます。（鹿島昌也）

北代縄文広場この1年 -2003年度-

**地域ふれあい事業 元気っ子～縄文文化体験の集い～
in 北代縄文広場 15.7.13**

富山県少年補導員連絡協議会・富山警察署少年補導員連絡協議会の主催で開催されました。

約250人の小学生が参加し、広場の解説を聞き、土器づくり・勾玉づくり・ソバ打ち・火おこしなどを体験しました。警察音楽隊の演奏に子どもたちは熱心に耳をかたむけていました。



縄文アドベンチャーキャンプ 15.7.20~8.24



夏休みの土・日曜日を利用して実施されました。

このキャンプは4年目を迎めました。西田地方・越川・東部・四方・光陽・奥田の6校下の親子160人が参加しました。

子供たちは、学芸員や解説ボランティアの指導のもと、縄文土器づくり、勾玉づくり、火おこしなどを体験しました。



佛優・刈谷俊介さん視察 15.10.5

佛優で考古学にも詳しい刈谷俊介さん(日本考古学協会員)がテレビ取材のために来跡されました。藤田所長の案内によって一巡され、土屋根住居の復元に深い关心を寄せておられました。

「北代遺跡に魅せられて」と写真パネルに揮毫されました。



富山西ライオンズクラブ(新井司郎会長)から寄贈

15.11.22

富山西ライオンズクラブから樹木(エゴノキ、モミ、オニグルミ、シラカシ)とポスター掲示板を寄贈いただきました。

樹木の植樹には地元長岡小学校の児童たちが協力してくれました。



中国の考古学者視察 15.8.2

研究会議「環日本海の玉文化の始源と展開」の事前研究のため来日された香港中文大学教授 鄭聰先生が、土屋根住居と高床建物を視察されました。

中国とベトナムの考古学者視察 15.12.12

研究会議「環日本海の玉文化の始源と展開」に出席のため来日された鄧聰(香港中文大学教授)、劉國祥(中国社会科学院副研究員)、牟永抗(浙江省考古学会顧問)、Nguyen Kim Dung(ベトナム考古学研究所)の4名の先生方が来訪されました。

牟永抗顧問は、高床建物の梯子(模造)を見て、「このような梯子は出土しているのですか。中国では河姆渡遺跡から出土しています。」と話されました。



縄文冬まつり開催 16.1.31

長岡校下ふるさとづくり推進協議会の主催で開催されました。左義長・餅つき・的あてゲーム・縄文土器づくりなどが地元住民320人が参加して行われました。

当日は天候がよく、子供たちの声が雪の縄文広場にこだましていました。

土屋根住居のリニューアル 15.10~15.12



北代縄文広場に復元された土屋根住居の5棟のうち2棟(1号住居と13号住居)の修繕を行いました。

住居内に雨漏りや腐食した部分を取替え、また調湿建材(住居内の湿度を調整する機能がある)と防水シートを新たに組み込み、これまでよりも快適な、長もちする住居に生まれ変わりました。

埋蔵文化財センターこの1年 -2003年度-

放射性炭素年代測定試料の調査 小林謙一先生 15.8.7

国立歴史民俗博物館研究員の小林謙一先生が、今話題の高精度年代測定(AMSによる)用の試料を、富山市開ヶ丘狐谷Ⅲ遺跡(縄文中期)、吉岡遺跡(縄文晚期)など、数遺跡の土器の表面に付着したおこげから採集されました。

それらの測定結果は、富山の縄文時代の年代解明に大きく役立つと考えられます。



顔面把手付き土器の調査 渡辺 誠先生 15.9.13

龜田正夫氏所蔵の顔面把手付き土器(北日本新聞15.7.2発表)について、研究の第一人者である山梨県立考古博物館長 渡辺誠先生が実物の調査のため来所されました。

縄文の大規模集落の全容が明らかに

開ヶ丘孤谷Ⅲ遺跡

開ヶ丘孤谷Ⅲ遺跡は、富山市南西部の射水丘陵東端部に位置する縄文時代中期の大規模集落です。近くには湧水地があり、当時の人々にとって生活の場として適していたものと思われます。14年度に8,200m²の調査を行い、36棟の竪穴住居を検出しました。15年度は残りの9,700m²の調査を行い、集落のはば全体の調査を終え、当時の集落の様子を明らかにすることができました。

●竪穴住居39棟と掘立柱建物6棟を検出

本年度は39棟の竪穴住居を確認しました。中期中葉（約4,500年前）のものを主体とし、わずかに中期前葉（約5,000年前）のものがあります。住居は円形や梢円形、方形などさまざまな形がみられます。住居の床には柱を立てていた穴があります。柱の数は1本～12本とさまざまで、平均的なものは4本あるいは6本で建てられたものです。



大型石組炉をもつF区1号住居跡

住居の中央には調理や暖をとるための炉があります。炉の多くは石で囲いを作った石組炉です。石を二重に囲んで長さ1.5mを超える大型のものや、炉の中央に土器を埋めたり、土器片を敷き詰めたりするものなどさまざまな種類がみられます。

住居の平均的な規模は20m²前後で、大きいものでは約35m²、小さいものはその1/10の約3.5m²です。2畳ほどの面積しかなく、とても家族で生活できる広さではありません。こうした小型の住居はほかにも数棟見つかっています。現在のところどのような役割をもっていたのかはっきりとわかっていないが、一説には出産小屋などとして使われたのではないかということが民俗例などから推定されています。

また、火災で燃えた住居（焼失住居）が1棟ありました。焼失住居は焼けた木材などが残っているため、当時の住居がどのような構造であったのか推定できる格好の資料となります。この住居では炭化した木材の上から焼けた土が検出され、屋根に土が葺かれていた可能性の高いことがわかりました。国指定史跡北代遺跡（富山市）の竪穴住居でも土葺き屋根が復元されています。



また、掘立柱建物も6棟見つかりました。掘立柱建物は長方形に柱の穴が並んだもので、高床または地面を床にした建物と考えられます。このうちの1棟は、長辺（桁行）が11.5m、短辺（梁行）が3.5mあり、きわめて大型の部類に入ります。掘立柱建物の用途については、食料の貯蔵庫や祭祀にかかる建物、夏季の住居など様々な推定がなされています。

●生活の道具や祭りの道具

遺跡からは縄文人が使用した多量の道具類が出土し、当時の暮らしぶりがうかがえます。道具類の多くは竪穴住居内から出土しました。

最も多いのは煮炊きや貯蔵に使ったとみられる土器です。土器の形や大きさは千差万別で、また表面に付けられる文様も

縄目のものや半分に割った竹で線を描くものなどさまざまなデザインがあります。ほかに新潟県や東北地方の土器に似通ったものも見つかっています。石器には、矢の先に付ける石鏃など狩猟用の道具のほか、木材伐採用の磨製石斧、土掘り用の打製石斧、漁網用の石錐、ドングリなど堅果類を磨り潰すための磨石や石皿などがあります。

こうした日常生活に使った道具のほかに、土偶や三角とう形土製品など呪術に関係する道具も出土しています。土偶は子孫繁栄や豊穣の願いをこめて作られたと考えられ、一般に破損した状態で見つかります。当時の人々が願いを込めて、人為的に打ち割った

と考えられます。今回は3点出土しましたが、腕や足が失われていたり、妊娠のお腹の部分だけが残るなど、やはりいずれも破損した状態で見つかりました。三角柱状の三角とう形土製品は、表面に文様がつけられています。どのように使用されたのかについてははつきりとわかつていません。

このほか、耳たぶに孔をあけて着ける耳栓や琥珀・滑石で作った玉など、当時の人々が身に着けた装身具も見つかっています。



出土した土偶

●集落の移り変わり

本遺跡で確認された竪穴住居は全部で75棟にものぼり、ほかに掘立住建物が6棟あります。これらはすべてが同時に存在していたのではなく、幾世代にもわたって建てられて続けた結果です。同時に建っていたのは数棟であったと思われます。

遺跡内は南側が丘陵最高地点の平坦地で、中央部は緩やかな斜面となり、一段低い北側では再び平坦地となります。竪穴住居は北側と南側の平坦地に分かれて分布し、北側では中期前葉の時期のものが多く、南側には中期中葉のものが集中していることから、中期前葉と中期中葉にかけての時期に集落を南に移したことがうかがえます。

中期前葉の北側集落は、広場を囲むように竪穴住居が半円形状に並んでいます。広場の中央には1棟だけ竪穴住居が孤立して存在しており、特別な意味をもっていたのかもしれません。竪穴住居の平面形は円形や橢円形のものがほとんどです。住居の規模は20m²前後のものが多く、炉は地面を掘り産めた地床炉です。

中期中葉の南側集落では、中央に円形の広場があり、その周囲に掘立柱建物、さらにそれを取り囲むように竪穴住居が分布しています。広場内からは土坑が数多く見つかり、そのうちの1基からは琥珀玉が出土しました。これは死者と一緒に埋められたものへの可能性があるため、広場に墓があったのかもしれません。竪穴住居は円形・橢円形に加えて、方形のものが増えてきます。また、大規模な住居と小規模な住居の差が大きくなり、炉も地床炉から石組炉へ変わります。県内や新潟県などの他の遺跡でも、この時期同じような変化が認められています。集落の構造は、近くでは新潟県に類似した例があります。先に述べた大型炉や、土器の類似点なども考えると、新潟県地方からの影響が強かったものと考えられます。

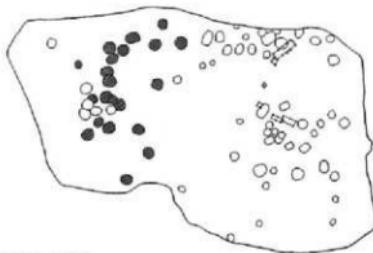
北側の集落も南側の集落も中

央に広場を設けることを特徴としており、縄文時代にはこうした広場のある集落が数多く認められています。数百年にわたって集落が営まれ続けたにもかかわらず、広場には竪穴住居や掘立柱建物などが建てられていないことをみると、当時の人々の間には広場を特別な場とする意識が受け継がれていたようです。

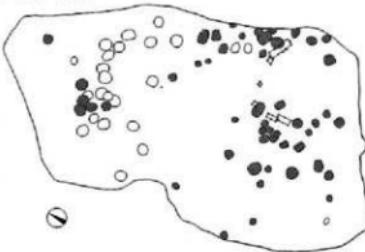
本遺跡は大規模な縄文集落の全体が発掘された県内はじめての例となります。県内だけでなく、北陸の縄文時代の集落研究にとってたいへん貴重な資料を提供することになりました。

(野垣好史)

開ヶ丘孤谷Ⅲ遺跡の集落構造の変遷 (中期前葉)



（中期中葉）



奈良時代の富山を探るフォーラム記録集刊行のお知らせ

平成12年度から14年度に開催した、第1回～3回の「奈良時代の富山を探る」フォーラムの記録をまとめた記録集を刊行します。

ご希望のかたは下記へお申し込みください。

記録集 1冊 ¥1,000 送料340円（2冊以上の場合は別途お問合せください）

申込先 富山市教育委員会埋蔵文化財センター

〒930-0803 富山市下新本町5-12

Tel. 076-442-4246 Fax 076-442-5810

E-mail: maizoubunka-01@city.toyama.lg.jp

北陸最大級の土偶で大がかりな呪術

長岡八町遺跡は、吳羽山丘陵北西麓の富山市長岡・北代新地内に位置します。遺跡は縄文時代後期後葉～晚期前葉（約3,500年前）の集落跡で、射水平野を見下ろす高台にあります。南側約500mには、縄文時代中期後葉（約4,000年前）の国指定史跡北代遺跡が所在します。

集落の北側には湧水のある深い谷が入り込んでいます。

調査では、後期～晚期の掘立柱建物跡や大型柱穴、貯藏穴と考えられる土坑などが検出されました。

●さまざまな祭祀遺物が出土

谷の斜面からは大量の縄文土器や石器とともに、土偶や石棒、石刀、御物石器、独結石など祭祀に用いられたと考えられる遺物がまとまって出土しました。熱を受け欠損した石棒などがみられることから、祭祀行為が行われたあと意図的にこわされ、谷に廃棄されたと考えられます。

●北陸最大級の土偶頭部の出土

これら祭祀遺物の中で、本遺跡を代表する遺物として北陸最大級の土偶の頭部の出土があげられます（表紙参照）。昭和35年には富山考古学会員の山内賢一氏（小杉町）によって大型土偶の顔面の破片が採集されています。今回出土した大型土偶と目鼻立ちが大変よく似ており、姉妹土偶ではないかとの見方もできます。

今回出土した土偶は、耳孔裏面のひもの縫刻や顔面が平滑なことから、仮面を装着していたと推測できます。

●土偶祭祀の変化と長岡八町ムラ

縄文時代の人々は、魔よけや自然界の動植物の繁殖、子孫の繁栄を願って土偶を製作しました。その女神である土偶にさらに仮面を装着させることによって、これまで行つてきた土偶祭式では拭い去ることのできなくなつたさまざまな災いを取り払うために、一層の呪力を期待したのかもしれません。

昭和48年の試掘調査で出土した赤彩された土笛状土製品は、これを用いて精霊や祖先の靈を呼び寄せ、来る新しい時代の変化に備えるための力を求めたとも考えられます。

2点もの大型土偶が用いられていた背景には、この遺跡が周辺の村々から人々が集まり、大がかりな祭祀をとり行う拠点集落ということがあったのでしょうか。（鹿島昌也）

長岡八町遺跡



発掘調査区（南から）



縄文後期の土器

旧神通川河口に営まれた集落

打出遺跡

打出遺跡は、富山市北西の海岸部に位置する集落跡で、弥生後期～古墳前期（約1800～1600年前）の集落跡及び中世（650～800年前）の館跡です。遺跡の北側はかつての神通川跡で、1～3mほど低くなっています。集落は河川に面する河岸段丘上に立地します。

弥生時代後期～古墳時代前期（約1800～1600年前）の集落は岸辺に存在し、中世（650～800年前）の集落はそこよりやや内陸側に営まれています。

●川辺の集落－弥生～古墳時代－

弥生～古墳時代の集落は、方形の堅穴住居5棟が検出されています。

遺跡の北部で検出された旧神通川跡（古くは「カンの川」、「古古川」と呼ばれた）の岸辺の傾斜地には、古墳時代前期に木道と見られる木の集積や、赤く塗った

祭祀用の高杯や壺など多数の土器が廃棄された場所が確認されました。

なかでも小型の壺を3つ積み上げた、三連壺と呼ぶ特殊な祭祀用の赤彩土器は、古墳時代前期ころに畿内を中心に作られた特殊な土器（二連壺・三連壺・四連壺）の一種で、本遺跡が最北端の出土例として注目されます。

これらの祭祀遺構は、水または河川に対する祓めや祓れの清めなどの目的で行われたことが想定されます。

●濠に関わる館か－中世－

中世の集落は、方形に堀で囲った屋敷地に、掘立柱建物・井戸・溝・土坑などを配置する館で、複数が所在します。この館群の南側には両側に側溝がある幅90cmの道路が存在します。

中世には旧神通川河口に三津七濠のひとつ「越中岩瀬濠」の存在が推定されており、この遺跡が濠町と関連しているのかもしれません。（古川知明）



旧神通川跡



三連壺



古墳時代の堅穴住居内土器出土状況



中世の道路跡

呉羽山丘陵北西部における古墳の出現

呉羽三ツ塚古墳・呉羽三ツ塚遺跡

呉羽三ツ塚古墳（市遺跡 No.139）・呉羽三ツ塚遺跡（同 No.140）は、富山市中心部から北西約4km離れた呉羽山丘陵北西部の台地上に位置し、周辺では最高所（標高約14m）に営まれています。土地区画整理事業計画に伴い、平成15年11～12月に試掘確認調査を行いました。

●呉羽山丘陵の首長墳 呉羽三ツ塚古墳

呉羽山丘陵には弥生時代終末期（約1,800年前）以降、古墳時代終末期（約1,350年前）に至るまで地域首長の墳墓が数多く築かれています。呉羽三ツ塚古墳もその一つです。住宅建築や開墾などによって一部が削られており、これまでには13×15m、高さ2.5mの方墳と推定されていました。

試掘確認調査の結果、本来の墳丘は15.5m×16.5m前後、高さ約2～2.3mを測り、ほぼ正方形の方墳と推定できます。墳丘は周溝を掘削した際に生じた土を約2～2.3mの高さに盛って造成しています。墳丘頂部に近い部分では良質の地山（明褐色ローム土）を使用し、表面をきれいに見せようとしています。墳丘上に葺石・埴輪・段築はないことも明らかになりました。

古墳と周辺を区画するため、幅約2～3mの周溝を墳丘の周りに巡らせていました。深いところでは1m以上の規模があります。周溝の外側で測ると古墳のエリアは約20m×23mとなります。周溝内からは縄文土器などの遺物がわずかに出土しました。古墳の築造時期を決定づける土器は確認されていませんが、古墳の形から、古墳時代前期（約1,700年前）のはじめに築かれたと推定されます。

当地域における地域王権の発生から展開過程を探る上で、今回の調査成果は重要な意味をもっています。

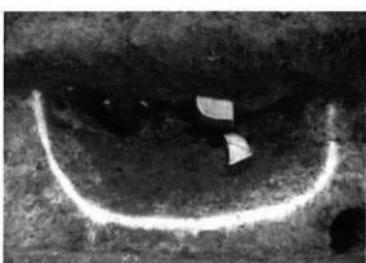
●奈良時代の集落跡 呉羽三ツ塚遺跡

呉羽三ツ塚古墳が立地する台地とは谷を挟んで西側に呉羽三ツ塚遺跡が所在します。試掘確認調査の結果、奈良時代の溝や土坑、ピットなどがまとめて確認され、約5,000m²の面積で広がる奈良時代の集落跡であることがわかりました。奈良時代の須恵器・土師器・鉄滓や中世の珠洲焼などが出土しています。鉄滓が出土していることから、鐵づくりをしていた可能性も考えられます。

（小黒智久）



呉羽三ツ塚古墳の周溝



呉羽三ツ塚遺跡の土坑

古代の婦負郡の祭祀場か

花の木C遺跡

花の木C遺跡は、呉羽山丘陵の西側に広がる境野新扇状地の扇端に位置し、標高は約8mです。

遺跡からは古代の溝跡や中世の溝跡、土坑などが検出されました。

古代の溝跡は、幅約2m、深さ70cmで、溝跡の底近くから、木製の人形3点、斎串1点、曲げ物の底板1点、ほぼ完形品の土師器の長胴壺1点、小型壺1点、須恵器杯2点などがまとめて出土しました。

ほぼ完形に近い人形2点は、ともに顔部分がありません。写真1の人形は、長さ9.8cm、幅2cm、厚さ1mmでとても薄い人形です。手や足は下から切り込みを入れて表現しています。また、手の少し上には、小さな穴がふたつ開いており、そこに紐の痕跡が残っています。足の付け根部分にも穴が開いています。いくつかの人形を縛っていたと考えられます。

写真2の人形は、長さ13.3cm、幅2cm、厚さ2mmで人形1よりも厚く、しっかりしています。この人形も下からの切り込みで手と足を表現しています。腰のあたりはやや膨らんだように作られおり、足の付け根部分を少し切り欠いているので、女性を表現したものかもしれません。この人形にも足の付け根あたりに小さな穴があり、そこにはひもの痕跡が残っています。

写真3の斎串は、長さ16.5cm、幅2.1cm、厚さ3mmで、上下とも尖っています。

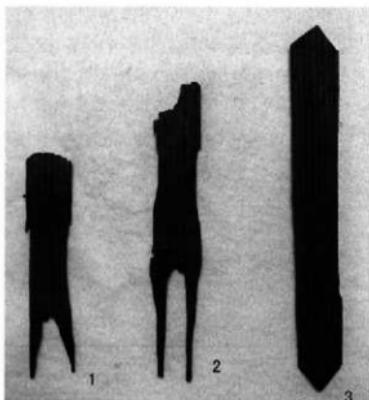


古代の溝から出土した木製祭祀具や土器

これらの人形や斎串は織れを祓うまじないに使用されました。豊田大塚・中吉原遺跡(富山市)や北高木遺跡(大島町)などでは人形や斎串とともに、土器に墨で顔を描いた人面墨書き土器が出土していますが、本遺跡で出土した土器には、人面が描かれていません。

これらの土器は、人形や斎串といった祭祀具と同時に出土していることや完全な形で捨てられていることから、人面墨書き土器と同じように祓いの道具として使用したと考えられます。当時の祭祀のあり方を考える上で重要な意味を持つと考えられます。

また、当時花の木C遺跡あたりは婦負郡の郡域と考えられ、祭祀に携わったのは婦負郡家の関係者と推定されます。(堀沢祐一)



古代の人形・斎串

中世前期の有力者の屋敷

みずはしかわひろ なかばんぱいせき
水橋金広・中馬場遺跡

水橋金広・中馬場遺跡では14年度調査区の南側を引き続き調査しました。これまでの調査では室町時代から江戸時代前期にかけての館跡、集落跡を確認していましたが、今年度は、平安時代末から南北朝時代（約600～850年前）の集落跡を検出しました。

遺構には、溝、掘立柱建物、井戸、方形堅穴状遺構、土坑などがあります。

溝には東から西へと流れる大溝や、居住地を方形に区切る区画溝などがあります。

大溝からは漆器や箸状木製品、まじないに使われたとみられる〇印が多く記された板などの木製品が多数出土しました。漆器は小皿が多く、「亀甲紋+四つかたばみ」や「桐十竹」などの文様が細かく丁寧に描かれています。区画溝からは、珠洲焼、中世土師器、青磁、白磁などの破片が多く出土しています。

井戸は、14基のうち、縦板組隅柱横桟どめなど何らかの施設をもつものが3基ありました。その内の1基の井戸側の中から漆椀、短刀、糸巻きなどが出土しました。大半は小型の素掘り井戸ですが、井戸を埋める前に井戸側などの材を抜いている例も3基ありました。素掘り井戸からも●印や直線といった記号が書かれた板が見つかっています。

掘立柱建物は3棟以上が存在しており、柱穴には柱が腐らずに残っているものが多くありました。柱は丁寧に整形されており、運搬時の繩かけ用と思われる彫り込みがみられました。また、柱が沈んだり、傾いたりすることを防ぐために、柱の下や脇に板や田下駄などを据えているものも多く見られました。

また、作業場とみられる方形に掘り込んだ堅穴状遺構が2基あります。うち1基には床面の真中に盛り上がりがあり、その上に小さな穴がありました。ロクロなどを据えた工房であった可能性があります。

今回の調査によって、中世前期の屋敷地が区画溝、井戸、掘立柱建物、方形堅穴状遺構から構成されていることがわかりました。高級な漆器、短刀、中国製の青磁・白磁などが見つかっていることから、有力者の屋敷跡であったと思われます。

中世前期の層の下には弥生時代後期（約1700年前）の溝1条が見つかりました。溝の中には穴が3基並んでおり、その内の1基は底に弥生土器の壺の底が据えられています。（安達志津）



掘立柱建物跡



工房とみられる堅穴状遺構

成政の前線基地の位置をほぼ確定

こりでじゆ
小出城跡

●小出城の概要

小出城跡は富山市の東北部、水橋小出地内の小出神社周辺にあったと伝えられています。天正9(1581)年3月「小出の戦い」で織田信長方の佐々成政と越後上杉景勝方が戦火を交えた際、織田方前線基地として越中戦国史に登場します。織田・上杉勢力の境界線上に位置していた城で、『越中古城記』には「南北二十二間、東西三十間の平城」と記されています。しかし、正確な絵図面、史料が残っておらず、一帯が水田のため、具体的な位置や規模は特定されていませんでした。

●大規模な堀跡

平成10~13年度の試掘確認では、小出神社北側で東西方向に走る幅10mの堀跡を確認していました。また、平成13年度試掘調査では陶磁器類や漆器、五輪塔が出土しています。

今回県道拡幅工事に伴い、平成15年8月~9月にかけて約193m²の発掘調査を行い、小出神社北側約150mの位置に幅6m以上(推定幅約10m)の堀跡1条を東西方向に延長33mにわたって発掘しました。深さ約1m、傾斜角度約20度の堀跡です。この堀跡と小出神社の間に、小出城の中心部があったと推定されます。

今回の調査で南北約150mの規模の郭をもつ城だったことがわかりました。約60m四方とされている文献記述を大幅に上回り、約100m四方の郭を持つ国史跡安田城(婦中町)を超える規模の郭だった可能性が高くなりました。

●当時の生活を物語る遺物

堀の中からは珠洲焼や中世土師器、越前焼、瀬戸美濃、青磁等国内外の陶磁器類をはじめ、漆碗、祭祀の道具である人形、機織り機の部材、曲げ物、編み物、子供の下駄、木筒、銅錢(永樂通寶)、炭化種子等当時の暮らししぶりがわかる遺物が多く出土しました。

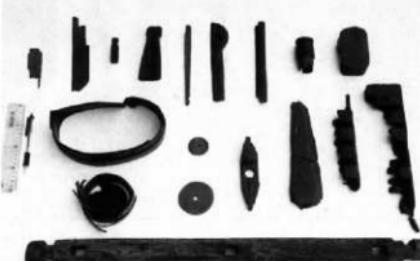
完形に近い状態で出土した土師器の皿のいくつかには煤が付着しており、灯明皿として使用されました。

炭化種子はヒエの固まりと見られ、米以外にも雑穀を食べていてと思われます。城館で暮らす武将達も質素な食事をしていたかもしれません。

堀の中から出土した人形は、魔よけ・まじない等の道具として使用さ



小出城の堀跡（西から）



各種の木製品

れていたと考えられています。また、馬の骨や歯が出土しました。雨乞いのために馬を殺し、水の神様への納め物として堀に投棄したと考えられます。

また、糸巻きや紡錘車、機織り機の部材、子供の下駄、かんざしが出土したことから、小出城内で女性や子供が生活をしていたことがわかります。

●戦国期を思わせる痕跡

戦を連想するものとして、当時の武士が使ったと見られる長刀の柄の一部や腰刀が出土しました。また平成13年の試掘調査で硝煙の匂いが残った土製弾丸が見つかりました。また土器類や石は2割程度が火を受けていることから、戦火を受けた可能性が考えられます。

●戦国時代の漆器椀

漆椀が小面積(約193m²)から45点も出土することは注目されます。漆椀には赤漆で「牡丹と扇」や「俵紋」、「鶴亀と松」、「鶴丸紋」、「扇紋」等の文様が丁寧に描かれていました。弓庄城(上市町)や木舟城(福岡町)、放生津城(新湊市)等県内の主要な中世城館から出土した漆器の文様と共に通っています。また、45点という出土量は県内では梅原胡麻堂遺跡(福光町)に次ぐ出土量で、「牡丹と扇」の絵柄の椀は県内初の出土です。

「俵紋」「鶴亀と松」「鶴丸紋」の絵柄は長寿を願う文様と考えられています。武将達が戦で勝利を収めるため、生死の狭間を生き抜くための心のよりどころとしてこれらの漆椀を使用していたのかもしれません。

また、内側に漆が付着した曲物や箱の部材があり、漆が入っていたと考えられます。小出城内に漆製品を専門に扱う城内専属の職人を招き入れて、格の高い人々が優れた漆製品を好んで使用していたと推測できます。

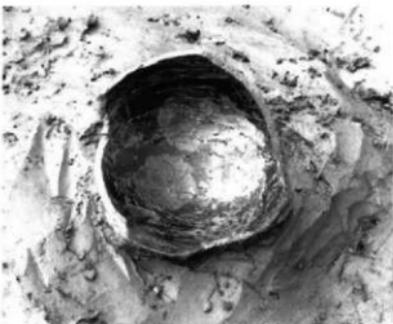
●沼地に眠る平城

通常、漆製品や木製品等はほとんど残らず腐ってしまいます。小出城では粘質で水分を多く含んだ地質が遺物を真空パック保存して酸化・腐食を防いだため、漆製品をはじめとする多くの木製品が出土したのです。この沼地とも言うべき地質が敵の動きを鈍らさせ混乱を促す充分な防衛壁となつたようです。加えて、敵の進入を防ぐ白岩川、小出川等に囲まれていた小出城は前線基地を構えるには大変有効な要害の地であったということが言えます。

小出城は今なおほとんどが地中に眠っています。しかし、今回の調査で戦乱の場、また生活の場として小出城が確実に存在したことを確認することができました。今後の調査によって、越中戦国史の一端を解明する上で重要な小出城の姿が明らかになっていくことでしょう。



長刀の柄



出土した漆椀「牡丹と扇」

本丸・西の丸で戦国期神保氏の城を確認

とやまじょうじゆ
富山城跡

富山城址公園整備計画に伴い、平成 15 年 11~12 月に城址公園内で行なった試掘確認調査で、佐々成政以前に築城された戦国時代の富山城の存在が明らかになりました。

これまで県庁建築・戦災・地下駐車場建設などで城跡はほとんど残っていないとされてきましたが、今回の調査により室町時代から江戸時代の遺構が良好に保存されていることがわかりました。

● 戦国期の富山城 天文 12 (1543) 年ころ越中守護代神保長職が最初に城を整備し、その後佐々成政が入城しました。江戸時代の歴史書「富山之記」に記された城下の描写から、星井町以西に城があつたとする説もありました。

● 中世富山城の構造 これまでの調査で、戦国時代の遺構は城址公園本丸と西の丸に広がっていることがわかりました。本丸中央では、地下 1m~2.6m 南北に延びる堀跡が検出されました。中世富山城の郭と堀の位置は江戸時代と異なっていたことがわかりました。

● 戦国武将のくらしおり

本丸では南北に延びる堀跡と、それを埋めて整地した跡を地下 1m~2.6m で確認しました。堀の中からは、大量の素焼きの皿、焼けた木、炭化したコメ・ヒエ・アワ・マメ等の穀物が出土しました。これらの穀類は備蓄されていたものが大火で焼けて捨てられたと推定されます。

西の丸では、地下 1.5m に鍛冶工房跡があり、刀など刃物の鍛錬や仕上げの工程を示す遺物がまとまって出土しました。城内で武器や工具を生産していたことがわかります。またその下 10cm から検出した建物跡（土間を確認）からは茶臼が出土し、戦国武将が茶を好んだという風習を裏付けています。

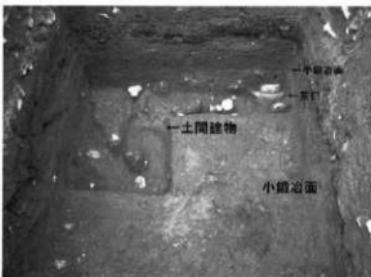
このように中世富山城の内部のようすが次第に明らかになってきました。（古川知明）



本丸で検出した戦国期の堀

検出した建物跡（土間を確認）からは茶臼が出土し、戦国武将が茶を好んだという風習を裏付けています。

このように中世富山城の内部のようすが次第に明らかになってきました。（古川知明）



戦国期の小鍋冶跡と土間遺構（西の丸）



戦国期の茶臼（下臼）

平成 15 年度埋蔵文化財センター事業

前号で掲載できなかった 14 年度のデータも掲載します

1 埋蔵文化財調査

●発掘調査 開発に先立ち、遺跡を記録保存することを目的とした調査です。(2月末現在)

遺跡名(市No.)	所在地	調査原因	面積(m ²)	主な遺構/遺物	遺跡の種類
打出 (No.009)	打出	組合施工土地区画整理	4,775	堅穴住居(弥生後期)、掘立柱建物・溝(弥生後期・古墳前期)、井戸・道路(中世)、河道(弥生・中世)／弥生土器、土師器、須恵器、珠洲・青磁・土鐘・漆碗・曲物	集落 居館
小出城跡 (No.055)	水橋小出	一般県道下砂子坂池田町線道路改良工事	193	塙跡(戰国)、井戸／土師器・珠洲・漆碗・木製品・木簡等	城館
長岡八町 (No.118)	北代新・長岡	北代最終処分場緑化工事	190	掘立柱建物・土坑(縄文後・晚期)／縄文土器・石器・土偶	集落
北代 (No.125)	北代	個人住宅建設	20	粘土採掘坑跡(縄文中～晚期)／縄文土器	集落
水橋金広・中馬場 (No.230)	水橋精水堂	県営農道整備(上条南部地区)	880	牌(弥生後期・鎌倉・室町)、掘立柱建物・井戸(鎌倉・室町)／弥生土器、須恵器、土師器・中世陶磁器、漆器・木製品・鉄器・馬齒・鰐鱗等	集落
開ヶ丘中 (No.449)	開ヶ丘	県営畠地帯総合整備事業	150	土坑等(平安)／須恵器・土師器・鉄器	集落 生産
開ヶ丘弧谷Ⅲ (No.455)	開ヶ丘	県営畠地帯総合整備事業	9,650	堅穴住居・掘立柱建物(縄文中期)・炭窯(平安)／ナイフ形石器(旧石器)、縄文土器・石器・土偶・玉類・須恵器・土師器	集落 生産
開ヶ丘弧谷Ⅱ (No.456)	開ヶ丘	県営畠地帯総合整備事業	950	土坑(縄文・古代)／縄文土器・須恵器・土師器	集落
黒瀬大屋 (No.479)	黒瀬	共同住宅建築	115	井戸・土坑(古代)／須恵器・土師器・曲物・箸(古代)・珠洲(中世)	集落
計 9 件			16,923		
14 年度 水橋専光寺	水橋専光寺 (No.230)	分譲住宅造成	2,665	土坑(古墳前期・平安・中世)、井戸(平安・中世)、掘立柱建物・溝(中世)／土師器・須恵器・珠洲・越前・瀬戸美濃・越中瀬戸	集落

●試掘確認調査

開発予定地内の遺跡の有無などを確認する調査です。(16年2月末現在)

遺跡名(市No.)	所在地	調査原因	対象面積(m ²)	調査結果
野田 (No.006)	奥羽野田	市道野田 2 号線拡幅	175	遺跡なし
打出 (No.009)	布目北	市道販垣小学校線拡幅	50	遺跡なし
今市 (No.010)	布目	国有地での埋蔵文化財有無の確認	5,322.64	遺跡なし／須恵器・土師器(奈良)、須恵器・土師器(古代)、不明炉盤
今市 (No.010)	八町南	駐車場造成	1,870	遺跡なし
浜黒崎飯田 (No.032)	浜黒崎	市道浜黒崎 10 号線拡幅	128	遺跡なし
宮条南 (No.043)	宮条	市道拡幅	64	遺跡なし
水橋畠等 (No.045)	水橋畠等	分譲住宅造成	800	遺跡なし
奥羽木郷 (No.062)	本郷中部	個人住宅建築	499	遺跡なし
東老田 II (No.070)	東老田	農道橋梁整備	92.15	遺跡なし
高木中坪 (No.096)	高木東	県営農道整備	301.61	遺跡なし
八町 II (No.109)	八町南	県営農道整備土質試験	1.5	溝(窪町)／須恵器(平安)・珠洲焼(窪町)
奥羽三ツ塚古墳 (No.139)	奥羽町	土地区画整理計画	195	ピット(縄文)・古墳周囲(古墳)／縄文土器・土師器(古墳)
奥羽三ツ塚 (No.140)	奥羽町	土地区画整理計画	20,000	溝・土坑・ピット(奈良)／須恵器・土師器・鉄滓(奈良)・珠洲焼(中世)
奥羽富田町 (No.160)	北代	病院増改築	3,800	遺跡なし
豊田中吉原 II (No.200)	豊田本町	宅地造成	1,616	遺跡なし
中富居 (No.206)	上富居	貸事務所・倉庫建築	1,810.95	遺跡なし
木橋の湯 (No.219)	木橋の湯	個人住宅建築	500	遺跡なし

遺跡名(市No.)	所在地	調査原因	対象面積(m ²)	調査結果
金尾新西(No.222)	水橋金尾新	駐車場造成	80	遺跡なし
	水橋金尾新	個人住宅建築	330.85	遺跡なし
砂川トクイノ (No.285)	中老田	農道整備	520	溝・土坑(平安)／土師器
花の木C(No.291)	中老田	農道整備	3,008	溝(平安・中世)／土師器・人形・畜糞・木製品
西金屋窯跡 (No.293)	古沢	市道路肩改良	7.5	灰原(奈良)／須恵器(奈良)
北押川・墓・段 (No.373)	池多	路地造成	35	土坑(縄文中)、炭窯(古代)／縄文土器(縄文中)、鉄滓(古代)
	池多	駐車場造成	800	遺跡なし
富山城跡(No.397)	本丸	富山城址公園整備計画	16	塙・土間建物・土坑・小鍛冶跡・整地跡(中世)、整地跡・石垣(江戸)／土師器・味焼・瀬戸美濃・鐵造剥片・鉄滓・羽口・某日・成化種実(中世)、唐津・伊万里・吉九谷・中国製磁器(江戸)
境松塚(No.400)	石金	個人住宅建築	309.58	遺跡なし
開ヶ丘孤谷Ⅲ (No.455)	開ヶ丘	県営畑地帯総合整備事業	8,100	竪穴住居・土坑(縄文中)／縄文土器(縄文中)
開ヶ丘孤谷Ⅱ (No.456)	開ヶ丘	県営畑地帯総合整備事業	1,560	燒壁土坑・土坑(古代)／土師器(古代)
杉谷A(No.478)	杉谷	駐車場造成	5,840	溝(古墳)、土坑(古墳・古代)／土師器・須恵器
黒瀬大屋(No.479)	黒瀬	墓地整備	82	遺跡なし
	黒瀬	共同住宅建築	998	井戸・土坑(奈良～平安)／土師器・須恵器(奈良～平安)、瀬戸美濃(鎌倉～室町)
	黒瀬	駐車場造成	1,899	遺跡なし／土師器(古代)
黒崎種田(No.480)	黒崎	マンション建築	826	遺跡なし／土師器・須恵器(古代)
	黒崎	共同住宅建築	942.72	遺跡なし／土師器(古代・中世)、木製品
二俣(No.516)	石田	個人住宅建築	60	遺跡なし
	石田	市道改良	120	遺跡なし
吉岡(No.525)	吉岡	診療所建築	1,206	土坑(縄文晩)、溝(古代)／縄文土器(縄文晩)、土師器(古代)
	吉岡	携帯電話基地局建設	452	遺跡なし
辰尾(No.531)	辰尾	個人住宅建築	316.51	遺跡なし
	辰尾	市道宮保辰尾1号線拡幅	133	遺跡なし
興国寺館跡 (No.536)	布市	個人住宅建築	500	遺跡なし／土師器・味焼(室町)、越中瀬戸(江戸)
	開発	公民館増築	346	遺跡なし
開発覚対(No.543)	開発	携帯電話基地局建設	353.94	遺跡なし
	開発	公民館増築	346	遺跡なし
栗山A(No.558)	懸在寺	市道懸在寺2号線改良	27	遺跡なし
大井(No.574)	大井	寺院増築	35	遺跡なし
森B(No.599)	森	店舗建築	1,383.8	遺跡なし／味焼(中世)、越中瀬戸(近世)、土師器・磁器(中～近世)、木柱
計 46件				
14年度 鶴谷南(No.283)	鶴谷	配水管布設等	60	灰原(奈良)／須恵器・土師器・瓦(奈良)
富山城跡(No.397)	本丸	富山城址公園整備計画	15	土坑・整地跡・焼跡(中世)、石垣(近世)／土師器(中世～近世)、伊万里
山本藤・木窯跡 (No.413)	山本	県営畑地帯総合整備事業	3,320	燒壁土坑・溝・穴(古代)／縄文土器
池多南(No.415)	山本	県営畑地帯総合整備事業	31,800	土坑・穴(縄文中)、炭窯・燒壁土坑・溝・穴(古代)／縄文土器(縄文中)、須恵器・鉄滓・炉壁(古代)
野下(No.468)	平岡	(主) 小杉崎中線新設	2,500	道路跡(古代)、溝・土坑(不明)
池多南II(No.608)	山本	県営畑地帯総合整備事業	4,200	燒壁土坑(古代)／炭

2 北代縄文広場管理

北代縄文広場を市民に公開し、活用するため、管理運営を長岡校下自治振興会に委託しています。縄文広場ではさまざまな行事が行われました。(p 2・3 参照)

3 展示・普及

(1) 発掘速報展 2003 PART1「戦国武将 佐々成政と富山」

①平成 16 年 2 月 21 日～2 月 27 日

富山市役所 1 階多目的ホール

②平成 16 年 3 月 2 日～3 月 18 日

富山市考古資料館



(2) 発掘速報展 2003 PART2「縄文のムラとまつり」

平成 16 年 3 月 20 日～3 月 31 日

富山市考古資料館

(3) 遺跡現地説明会

①北代遺跡 平成 15 年 3 月 20 日(木)

見学者 18 名

②長岡八町遺跡 平成 15 年 5 月 27 日(火)

長岡小学校児童ほか 41 名

③開ヶ丘孤谷Ⅲ遺跡 平成 15 年 9 月 28 日(日)

見学者 150 人

④富山城跡 平成 15 年 12 月 7 日(日)

見学者 80 名

(4) 展示

①奥田小学校ふるさと考古教材展示室第 8 回展示

第 8 回展示「むかし・むかしの文様(1)～縄文時代から平安時代～」展 平成 15 年 4 月 21 日～平成 16 年 3 月 4 日

第 9 回展示「むかし・むかしの形と文様(2)～中世から近世～」展 平成 16 年 3 月 5 日～平成 16 年 3 月 31 日

②北代縄文広場富山市内遺跡発掘速報コーナー展示

i 「吉岡遺跡発掘速報展」 平成 15 年 4 月 1 日～6 月 29 日

ii 「長岡八町遺跡発掘速報展」 平成 15 年 6 月 3 日～6 月 15 日

iii 「北代遺跡発掘速報展」 平成 15 年 7 月 11 日～9 月 30 日

iv 「故中林武夫氏寄贈品展」 平成 15 年 10 月 7 日～12 月 26 日

v 「北代遺跡発掘速報展 II」 平成 16 年 1 月 9 日～3 月 31 日

③富山市考古資料館

i 発掘速報展 2002 「古代人の暮らし」展 平成 15 年 4 月 1 日～6 月 1 日

ii 「亀田正夫氏コレクションより－大沢野町内出土人面付き土器－」展

平成 15 年 7 月 10 日～8 月 31 日

iii 発掘速報展 2003 PART1 「戦国武将 佐々成政と富山」

平成 16 年 3 月 2 日～3 月 18 日

iv 発掘速報展 2003 PART2 「縄文のムラとまつり」 平成 16 年 3 月 20 日～31 日

④その他

i 上条小学校埋蔵文化財展示 小出城跡出土品 80 点 平成 15 年 10 月 15 日

ii 倉垣公民館文化祭文化財展示 打出遺跡出土品 30 点 平成 15 年 11 月 1 日～3 日

iii 新庄公民館文化財展示 市内遺跡出土品 100 点 平成 16 年 1 月 24 日

(5) 資料貸出

富山市陶芸館 企画展「越中のやきもの一越中瀬戸焼と小杉焼を中心に」

貸出資料	水橋金広・中馬場遺跡出土瀬戸美濃焼3点
会期	平成15年6月27日～11月6日
糸魚川市長者ヶ原考古館	特別展「花開くヒスイ文化—玉・斧の生産と交易—」
貸出資料	栗山コレクション資料(平村下梨出土ひすい製大珠ほか)3点
会期	平成15年6月27日～11月6日
富山県埋蔵文化財センター	特別展「武士と茶の湯」
貸出資料	水橋金広・中馬場遺跡出土双六盤(複製品)1点
会期	平成15年10月6日～11月9日
富山県埋蔵文化財センター	企画展「昔むかしの早わかり」
貸出資料	柳谷南遺跡出土瓦3点、金屋南遺跡出土鏡・提子
会期	平成15年11月20日～平成16年3月19日
魚津市立歴史民俗博物館	企画展「運ばれてきた焼き物」
貸出資料	金屋南遺跡出土陶器2点
会期	平成15年10月11日～11月24日
小矢部市ふるさと歴史館	特別展「桜町繩文人の造形美—串田新式土器の世界—」
貸出資料	北代遺跡・古沢遺跡出土土器2点
会期	平成15年10月10日～12月23日

6) 講演・研究発表

古川知明・宮野秋彦	日本文化財科学会第20回大会「復元竪穴住居の保存環境に関する調査研究(第1報)(富山市北代遺跡その1)」(ポスター発表)	平成15年5月17日～18日
古川知明	富山県中世城館遺跡総合調査調査員会議発掘調査事例報告「富山市願海寺城跡・富山城跡」平成15年5月20日 富山県立図書館	
藤田富士夫	上市町教友会講和 「翡翠と古代文化」平成15年6月1日 上市町生涯学習会館	
藤田富士夫	富山市古沢小学校総合学習講座 「古沢のむかしむかし」平成15年7月15日 富山市古沢小学校	
藤田富士夫	北日本四季の会例会「考古学について」平成15年7月20日 富山県知事公館	
堀沢祐一	第2区域小教研研修会「縄文の歴史」平成15年9月17日 北代縄文広場	
藤田富士夫	ヒスイ文化フォーラム基調報告「縄文時代の装身具一系譜と用途—」、バネルディスカッション 平成15年10月5日 糸魚川市民会館	
古川知明	日本海北前シンポジウム「西岩瀬湊を水中考古学で調査する」「考古学が明らかにする中世岩瀬湊の実像」平成15年10月26日 海禅寺	
小林高範	五福公民館歴史講座「わが町五福の遺跡」平成15年10月29日五福公民館	
藤田富士夫	第11回春日井シンポジウム「地域学の先駆的実践としての「日本海文化シンポジウム」」平成15年11月8日、9日 春日井市民会館	
鹿島昌也	富山市職員福利厚生会事業「縄文遺跡—最新の発掘成果について—」平成15年11月22日 富山市職員会館	
小林高範	浜黒崎校下公民館活動推進協議会役員研修会「浜黒崎周辺の遺跡について」平成15年11月16日 吟羽ハイツ	
藤田富士夫・林寺巣州	敬和学園大学人文社会科学研究所研究会議「環日本海の玉文化の始源と展開」「玦状耳飾の製作遺跡—富山県立山町天林南遺跡—」平成15年12月13日 富山県民会館	
小林高範	富山市日本海文化研究所公開講座『海・潟・川をめぐる日本海文化』『遺跡からみた河川をめぐる中世の物流』平成16年1月20日 富山市民学習センター一分室	
野垣好史	富山考古学会総会「富山市開ヶ丘狐谷Ⅲ遺跡の発掘調査」平成16年1月31日 富山県民会館	
古川知明	富山考古学会総会「富山城跡試掘確認調査の成果」平成16年1月31日 富山県民会館	

7) 講座

①富山市民大学 市民の考古学「弥生・古墳時代のとやま」

回	月 日	講 座 题 目	講 師
1	5 / 9	稻作の始まりととやま	藤田所長
2	5 / 23	高地性集落から何が見える?	藤田所長
3	6 / 13	首長の登場と地域国家	藤田所長
4	6 / 27	弥生～古墳時代のくらし	近藤学芸員
5	7 / 11	玉作りの家と村	安達嘱託
6	9 / 12	呉羽山丘陵の古墳群	小黒学芸員

7	9/26	古墳時代の金工技術と対外交渉	小黒学芸員
8	10/10	残った古墳・埋もれた古墳—白岩川流域古墳群	鹿島学芸員
9	10/24	現地学習（白岩川流域古墳群を歩く）	鹿島学芸員
10	11/14	古墳から寺院へ	鹿島学芸員

②富山大学前期講義 博物館学Ⅲ「富山市小竹貝塚出土の骨」
平成 15 年 5 月 20 日 富山大学人文学部内山純藏助教授（於埋蔵文化財センター）

③県民カレッジテレビ放送講座 「遙かなる記憶」～考古学が語る富山～
平成 16 年 2 月 14 日「いのち輝く翠・ヒスイ」～日本海を巡る海の道～ 藤田所長出演

④市役所出前講座

- 平成 15 年 6 月 26 日 奥田校下ふるさとづくり推進協議会「遺跡からみた富山の歴史一火焔土器の美と文化ー」藤田所長（於 富山市立奥田公民館）35名
- 平成 15 年 10 月 31 日 富山県不動産鑑定士協会研修会「埋蔵文化財の取扱いについて」小林主任学芸員（於 カナルパークホテル）20名
- 平成 16 年 1 月 24 日 新庄校下ふるさとづくり推進協議会「遺跡からみた富山の歴史」鹿島学芸員（於 富山市立新庄公民館）50名
- 平成 16 年 2 月 20 日 上条公民館連絡協議会「遺跡からみた富山の歴史」鹿島学芸員（於 富山市立上条公民館）50名

(8) その他

①社会に学ぶ 14 歳の挑戦

- 出土品整理・遺跡発掘調査業務の体験
奥田中学校（参加者 2 名） 平成 15 年 6 月 30 日（月）～7 月 4 日（金）
新庄中学校（参加者 2 名） 平成 15 年 9 月 29 日（月）～10 月 3 日（金）
北部中学校（参加者 2 名） 平成 15 年 10 月 6 日（月）～10 月 10 日（金）
- 北代繩文広場管理業務の体験
吳羽中学校（参加者 5 名） 平成 15 年 6 月 9 日（月）～6 月 13 日（金）

②研修会参加等

独立行政法人奈良文化財研究所研修「特別研修 文化財写真課程」（野垣学芸員）

③新聞記事掲載

- 2003.5.24 長岡八町遺跡土偶（各紙）
 2003.6.10 「生と死の姉妹土偶」藤田富士夫（富山）
 2003.7.2 「顔面把手付き土器と判明」（北日本）亀田正夫氏所蔵資料
 2003.9.7 日本海文化研究所公開講座フォーラム「島と半島の日本海文化」開催
 2003.10.7 小出城跡発掘調査（各紙）
 2003.10.27 北前ロマン廻構想実行委員会設立記念シンポジウム「西岩瀬灘を水中考古学で調査する」（各紙）
 2003.11.5 「談論自由席 土偶に縄文人の精神性」鹿島昌也（北日本）
 2003.12.6 富山城跡試掘確認調査（各紙）
 2003.12.14 日本海学推進機構 研究会議「環日本海の玉文化の始源と展開」（各紙）
 2003.12.10 「回顧 2003(4) 考古学」鹿島昌也（北日本）
 2003.12.26 「日本列島の珠文化」藤田富士夫（北日本）
 2004.2.20～25 「解明進む富山城 上・中・下」古川知明（北日本）
 2004.2.22 発掘連報展 2003 Part1 「戦国武将佐々成政と富山」（各紙）
 2003.4～2004.3 「紙面批評」藤田富士夫（北日本）
 2003.4～2004.3 「高志の国」 藤田富士夫（読売）

4 遺跡地図管理

- ①新遺跡の追加 608 池多南 II 遺跡
 609 寺町草山遺跡
 610 池多遺跡 奈良・平安時代の生産跡（木炭窯を検出）
 弥生・古墳時代の集落跡（高地性集落か？）
 縄文時代中期の散布地（亀田正夫氏採集）

②遺跡範囲の変更等

9 打出遺跡 分布調査等による遺跡範囲の拡大

139	呉羽三ツ塚古墳	試掘確認調査による遺跡範囲の拡大
140	呉羽三ツ塚古墳	試掘確認調査による遺跡範囲の縮小
333	金草電化農場前遺跡	分布調査による遺跡範囲の拡大
392	寺町大平下遺跡	分布調査による遺跡範囲の拡大
415	池多南遺跡	試掘確認調査による遺跡範囲の縮小(佐伯哲也氏による)
433	菅谷城跡	分布調査による遺跡範囲の拡大
455	開ヶ丘孤谷Ⅲ遺跡	試掘確認調査による遺跡範囲の拡大
500	友杉遺跡	試掘確認調査による遺跡範囲の拡大
597	北代西山Ⅱ遺跡	試掘確認調査による遺跡範囲の拡大
③遺跡名の変更	118 八町遺跡を「長岡八町遺跡」に改称	
	196 豊田大塚遺跡を「豊田大塚・中吉原遺跡」に改称	

5 寄贈

(1)故林寺巣州氏コレクション 富山城跡出土瓦ほか採集品一括資料

林寺巣州氏（小杉町）は、広く県内を踏査され、多くの遺跡を発見されました。市史跡
柄谷南遺跡（奈良時代の窯跡群）、向野池遺跡（平安時代の土師器焼成跡）など、主に呉西地域での重要な遺跡・遺物の発見のほか、中世富山城の存在を推定する契機となった遺物の多くも林寺氏の採集によるもので、本市の埋蔵文化財保護に大きく貢献されました。

平成15年8月に富山市を始めとする県内採集の一括資料を寄贈されましたが、平成15年10月18日享年52歳で急逝されました。ここにご冥福をお祈りします。

なお、寄贈品は現在目録を作成のため整理中です。

(2)故湊 晨氏コレクション 岩瀬天神遺跡出土品ほか一括資料

湊晨氏（氷見市）は、前富山考古学会長として県内考古学会の設立発展に大きく寄与されました。湊氏は富山市岩瀬天神遺跡を発見され、1935（昭和10）年『考古学』に「越中に於ける陸奥式土器」と題して報告されており、学史上も重要な遺跡です。

湊氏は平成15年2月5日享年88歳でご逝去されました。ここにご冥福をお祈りします。

この岩瀬天神遺跡ほか富山市関係一括資料を平成16年1月にご遺族から寄贈いただきました。寄贈にあたっては小島俊彰氏（富山考古学会長）のご協力がありました。

なお寄贈品は現在目録の作成のため整理中です。

(3)亀田正夫氏コレクション 県内遺跡採集品一括資料、考古学関係図書268冊、双六盤1点

前号で紹介しました北代遺跡寄贈品のほか、富山市及び県内の遺跡採集資料を寄贈いただきました。



杉谷Ⅱ遺跡で古代瓦出土地点を示す故林寺巣州氏 (2003.6.12)



岩瀬天神遺跡採集の土偶
(「大鏡」第3号 1967年で紹介されたものです)



このほか、水橋金広・中馬場遺跡出土の安土桃山時代の厚板状双六盤の参考資料としてお借りしていた大正時代頃の厚板状双六盤（縦39cm 横25cm 厚 双六盤（大正頃）製駒付）を正式に寄贈いただきました。

なお、寄贈品は現在目録を作成のため整理中です。

(4)故中林武夫氏コレクション 北代遺跡出土品 115点、考古学関係図書 6冊

ご遺族の中林隆夫氏（富山市）より寄贈いただきました。

中林武夫氏（明治15年生、昭和15年没）は、現在の富山市北代新に生まれ、小学校教師として県内の学校に勤務されました。教鞭をとるかたわら、明治40年から大正13年までの間に北代周辺を中心に土器や石器を採集されました。

採集された考古資料は、縄文土器、石器（打製石斧、磨製石斧、石鑿、石錐、石劍、石棒等）、玉類（勾玉、垂玉、管玉、丸玉）、弥生土器、奈良～平安時代の須恵器、土師器など115点です。

石器の一部は、木の板や厚紙に針金やひもで固定して保存されており、石器の名称や用途、採集した場所、日付などが克明に記録されています。考古学研究の始まりの頃の出土品の保管

方法がよくわかります。

また注目される遺物として、完形の弥生土器（壺）があります。

あります。この土器は昭和11年に発行された『越中史前文化』（早川莊作著）に写真入りで紹介されているものです。

なお、合せて歴史や自然科学などに関する書籍、明治・大正時代の風俗がわかる写真、地図を富山市郷土博物館に、岩石・鉱物・化石標本は富山市科学文化センターに寄贈されました。寄贈された考古遺物は富山市北代縄文広場で展示しました。

(5)西井保氏資料 北代遺跡ほか市内遺跡出土品 593点を小矢部市教育委員会を通じ寄贈いただきました。現在目録作成のため整理中です。

6 研究

(1) 小研究会(会場：埋蔵文化財センター会議室)

平成15年4月18日 近藤頼子学芸員 「年代測定法について」

平成15年6月25日 橋本正春氏（富山県埋蔵文化センター）「保存処理について」

平成15年11月26日 岸田徹氏（富山大学大学院）「シリヤ・デデリエ洞窟における電磁気調査報告」

遺物名	点数
縄文土器	18点
打製石斧	18点
磨製石斧	14点
小型磨製石斧	5点
磨石	1点
石劍	3点
石刀	1点
石鑿	24点
石錐	1点
石棒	3点
筒石	1点
刮片	1点
不明石器	5点
勾玉	2点
垂玉	4点
丸玉	1点
管玉	2点
弥生土器	2点
須恵器・壺	2点
須恵器・杯	2点
須恵器・甕	3点
灯明風	2点
青磁	1点
合計	115



『越中史前文化』掲載の弥生土器



平成 16 年 1 月 28 日 野上賢志氏（株式会社協立印刷）「最新の印刷技術と発掘調査報告書」
平成 16 年 3 月 24 日 石山信郎氏（国土地理院北陸地方測量部）「発掘調査をめぐる最新の地理情報の利用」

- (2) 論文・報告・紹介(2003 年 4 月～2004 年 3 月)* 富山市内の遺跡に関連するものも含みます。
- 藤田富士夫 2003,4 「500 号記念に寄せて」『月刊考古学ジャーナル』500 ニューサイエンス社
- 藤田富士夫 2003,4 「大地の語り シリーズ第 13 回 経塚への願い」『観光とやま』No.87
富山市観光協会
- 藤田富士夫 2003,4 「駒井和愛博士の墓所」『考古学論究』第 9 号 立正大学考古学会
- 藤田富士夫 2003,5 「環状型块状耳飾に関する基礎的考察」『新世紀の考古学 大塚初重先生喜寿記念論文集』
- 古川知明・宮野秋彦 2003,5 「復元堅穴住居の保存環境に関する調査研究（第 1 報）（富山市北代遺跡その 1）」『日本文化財科学会第 20 回大会 研究発表要旨集』
- 古川知明 2003,5 「第 II 部 各都道府県の動向 16 富山県」『日本考古学年報』第 54 号（2001 年度版）日本考古学協会
- 寒川 旭 2003,6 「戦国時代の地震考古学」『戦国時代の考古学』高志書院
- 森田利枝 2003,6 「任海宮田遺跡出土の墨書き土器一平成 14 年度出土資料の紹介ー」『富山考古学研究 紀要第 6 号』財団法人富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所
- 細辻真澄 2003,6 「任海宮田遺跡出土の土錐について 2」『富山考古学研究 紀要第 6 号』財団法人富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所
- 内田亞紀子 2003,6 「富山県の黒色土器（2）—9～11 世紀の県内資料を中心にしてー」『富山考古学研究 紀要第 6 号』財団法人富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所
- 武田健次郎 2003,6 「猿形の富山平野における扇状地立地型集落の様相—7～10 世紀を中心にしてー」『富山考古学研究 紀要第 6 号』財団法人富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所
- 森 隆 2003,6 「富山県の中世土器（資料編）一県東部・富山平野を中心とした地域におけるー」『富山考古学研究 紀要第 6 号』財団法人富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所
- 堀沢祐一 2003,8 「越中国の隼合祭祀具と官衙遺跡」『縄文化財學論集』文化財学論集編集委員会
- 武田健次郎 2003,8 「富山県における表層地形からみた古代村落の分類案について」『縄文化財學論集』文化財学論集編集委員会
- 森 隆 2003,8 「古代北陸の河川漁業に関する若干の考察」『縄文化財學論集』文化財学論集編集委員会
- 高梨清志 2003,8 「古代製鉄用炭窯と立地」『縄文化財學論集』文化財学論集編集委員会
- 中村亮仁 2003,8 「富山県における植物利用—栽培植物の導入期と変革期ー」『縄文化財學論集』文化財学論集編集委員会
- 西井龍儀 2003,9 「蛇が島と高岡城の石垣」『富山市日本海文化研究所紀要』第 17 号
- 武田健次郎 2003,10 「とやま発掘最前線—任海宮田遺跡の調査からー」『埋文とやまと』vol.84 富山県埋蔵文化財センター
- 麻柄一志 2003,11 「北陸地方の焼失住居」『月刊考古学ジャーナル』509 ニュー・サイエンス社
- 堀沢祐一 2003,11 「縄文ワールド 73 北代遺跡」『縄文ファイル』No.97 三内丸山縄文发掘の会
- 藤田富士夫 2003,12 「森秀雄先生と業績二題」『大境』第 24 号 富山考古学会
- 古川知明 2003,12 「神通峡の縄文遺跡」『大境』第 24 号 富山考古学会
- 鹿島昌也・安達志津 2003,12 「中世の館から豊漁を祈る近世村落へ—富山市水橋金広・中馬場遺跡平成 14 年度（その 1）調査からー」『大境』第 24 号 富山考古学会
- 藤田富士夫 2004,1 「いのち輝く・翠ヒスイ—日本海を巡る海の道ー」『県民カレッジテレビ放送講座 考古学が語る富山 遥かなる記憶』富山県民生涯学習カレッジ・北日本放送
- 小黒智久 2004,3 「富山県高岡市桜谷古墳群出土金銅製方形板の再検討—古墳時代後期における金銅製品生産の一侧面ー」『富山市考古資料館紀要』第 23 号
- 増川宏一 2004,3 「中世富山の遊戯」『富山市考古資料館紀要』第 23 号
- 古川知明 2004,3 「富山県東部採集のヒスイについて」『富山市考古資料館報』No.41

宮野秋彦・西尾信廣・堀沢祐一 2004.3 「北代縄文広場竪穴住居の修繕について」『富山市考古資料館報』No.41
小黒智久 2004.3 「富山市呉羽三ツ塚古墳試掘確認調査速報」『富山市考古資料館報』No.41

加藤達行・古川知明 2004.3 「中世富山城の考古学的調査速報」『富山史壇』第142号 越中史壇会

藤田富士夫 2004.3 「大伴家持の歌に見る渡河地点について」『富山市の遺跡物語5』

加藤達行 2004.3 「富山城の破却について」『富山市の遺跡物語5』

野垣好史 2004.3 「開ヶ丘孤谷Ⅲ遺跡出土のナイフ形石器」『富山市の遺跡物語5』

古川知明 2004.3 「富山城本丸採集の瓦について」『富山市の遺跡物語5』

補足 (2002.11~2003.3)

湯原勝美 2002.11 「雙六盤の変遷について」『戯戯史研究』第14号 戯戯史学会

山崎美和 2003.2 「律令国家における越」『富山史壇』第139号 越中史壇会

森沢佐慶 2003.3 「富山市北代中尾遺跡出土骨について」『富山市考古資料館報』No.40

小黒智久 2003.3 「越中東部地域における初期須恵器」『富山市考古資料館報』No.40

小林高範 2003.3 「富山市金屋南遺跡から出土した銅製品について」『富山市考古資料館報』No.40

7 発掘調査報告書等(2003年度)

133 富山市長岡八町遺跡発掘調査報告書

134 富山市北代中尾Ⅲ遺跡発掘調査報告書

135 富山市開ヶ丘孤谷Ⅲ遺跡・開ヶ丘孤谷Ⅱ発掘調査報告書

136 富山市開ヶ丘孤谷Ⅲ遺跡発掘調査報告書

137 富山城跡試掘確認調査報告書

138 富山市打出遺跡発掘調査報告書

「奈良時代の富山を探る」フォーラム記録集

8 埋蔵文化財センター組織

所長 1 ————— 所長代理 1 ————— 主査 1

(生涯学習課主幹) └ 主任学芸員 1 ————— 学芸員 3 ————— 嘴託 2

└ 主任学芸員 1 ————— 学芸員 2 ————— 嘴託 2

事業費

①埋蔵文化財調査費 178,430千円

　発掘調査 5 遺跡、出土品整理 2 遺跡、市内試掘確認調査、市内出土品整理

②体制整備・一般管理費 13,860千円

③普及活動費 300千円

　「奈良時代の富山を探る」フォーラム記録集刊行、発掘速報展開催

④遺跡・史跡保護管理費 8,405千円

　北代縄文広場管理、北代縄文広場復元建物修理

研究余話IV 富山城本丸採集の瓦について

古川 知明

(埋蔵文化財センター主任学芸員)

ここに紹介する資料は、1988(昭和63)年10月に故林寺巣州氏(小杉町)が富山城本丸東側の石垣付近において採集された瓦である。城址公園内には現在でも多くの瓦が散布する。それらを採集分析した報告[齊藤ほか 1996]では明治以降の建築物の瓦とわかった。

また西井龍儀氏により本丸において採集された江戸初期とみられる軒平瓦の報告がある[西井 2001]。この報文中に林寺氏採集の丸瓦についても触れられており、軒平瓦と合わせて慶長14(1609)年本丸大火以前の可能性があることが指摘された。ここでは富山城最古の瓦として位置づけられるかもしれない丸瓦等林寺資料を中心に報告する。

林寺氏の資料 5 点はいずれも表面が黒灰色～暗灰色を呈するいぶし瓦で、いぶしに光沢はほとんど認められない。胎土に砂粒を多く含み、焼きはやや軟質である。丸瓦 4 点と平瓦 1 点があるが、いずれも瓦当面が認められず軒先瓦であるかどうかは不明である。
丸瓦（1～3）　いずれも玉縁付近の破片で、西井氏により「凸面に布目痕をもち、縦にヘラ削りを加えた特徴的な瓦」【西井前掲】とされた一群である。

1 は、厚さ 1.9cm～2.5cm、復元幅 13cm を測る。凸面は 1cm 当り経糸 10 本緯糸 10 本の粗い布目痕の上から玉縁辺りに縦方向のハケメ（1cm 当り 6 本の粗いもの）を施し、全体に縦方向（玉縁から先端方向）のミガキを行う。ミガキの幅は 1.2～1.5cm で一定している。なおこのミガキ手法は、ゆっくりヘラ状工具を押し付けながら丹念に器面を整えるもので、砂粒の移動は顕著ではない。光沢を帯びる部分も認められる。このような手法は西井氏のいう「ヘラナデ」【西井前掲】に相当しよう。

凹面は縦方向（先端から玉縁方向）のケズリが施され、通常凹面器面に残るコビキ痕、布目痕、繩痕、タタキ痕等はすべて削り取られている。長側端面は縦方向（先端から玉縁方向）のミガキを行う。玉縁部は内傾し、上原真人氏の分類 IV【上原 1984】にあたる。胎土には石英粒を多く含む。

2 は、現存部分で厚さ 2.3cm～2.6cm、復元幅 13cm を測り、1 と近似値を示す。凸面は、1cm 当り経糸 10 本緯糸 10 本の粗い布目痕がほぼ全体に存在し、その上に縦方向（先端側から玉縁方向）のミガキを行う。凹面は縦方向（先端側から玉縁方向）のケズリが施され、コビキ痕等は認められない。端面は縦方向の細かいミガキを行い、光沢が生じる。玉縁はあまり内傾しないが 1 と同様とみられる。胎土には石英粒を多く含む。

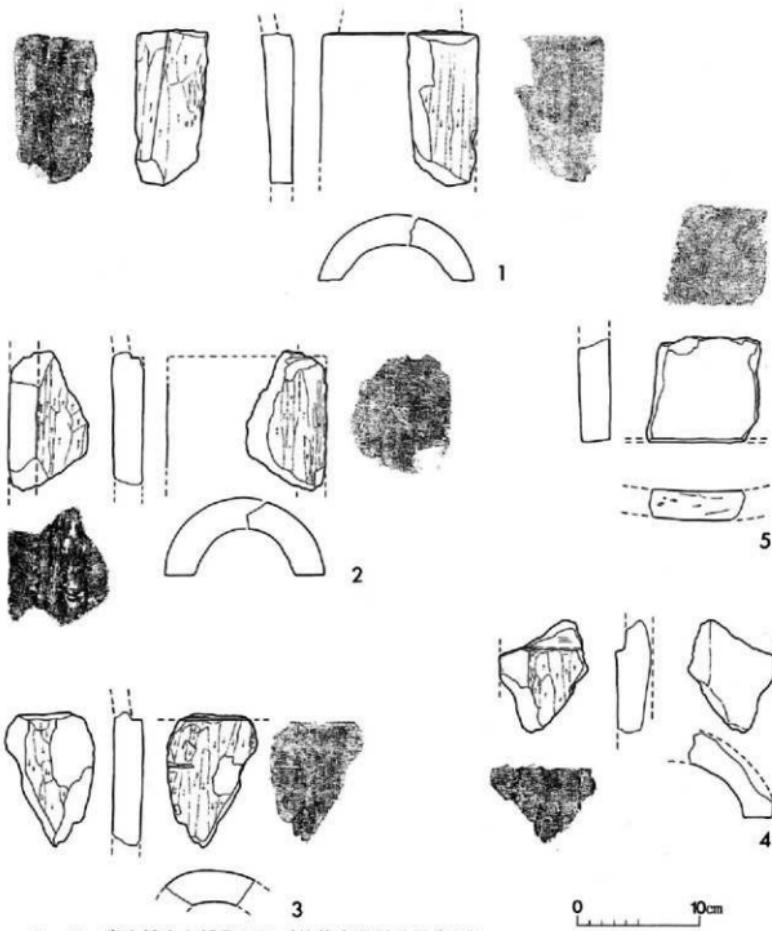
3 は、現存部分で厚さ 2.3cm～2.4cm を測る。焼き歪みがあり、復元幅は推定で 13cm とみられる。凸面は、粗い布目痕（本数不明）の上に縦方向（玉縁側から先端方向）のミガキを行い、その後部分的に縦方向（玉縁側から先端方向）のハケメを施す。布目痕はミガキでほとんど消されている。凹面は縦方向（玉縁側から先端方向）のケズリが施され、コビキ痕等は認められない。玉縁はあまり内傾しないが 1 と同様とみられる。胎土には石英粒を多く含む。

特殊瓦（4）　丸瓦の玉縁付近にあたる破片であるが、凹面側に段があり、凸面側へ落ち込んでいる。幅は推定 15cm で、1～3 よりも一回り大きい。凸面は二次被熱により表面がほとんど剥落しており、わずかに粗い布目痕が認められる。瓦の厚さ及び調整技法は不明である。凹面は縦方向（先端側から玉縁方向）のケズリが施され、コビキ痕、布目痕、繩痕、タタキ痕等は認められない。玉縁部は有段になっており、横方向の線状痕が認められ、ナデとみられる。端面は縦方向の細かいミガキにより平滑化する。胎土には石英粒を多く含む。

平瓦（5）　端部片である。表面は風化のためかなり磨耗する。厚さは 2.5cm を測る。凹面はケズリとみられる斜め方向の擦痕（線状痕）が認められる。凸面は磨耗により光沢を帯び調整は不明である。端面は右方向のケズリが行われる。胎土には石英粒を多く含む。

以上の観察から、丸瓦についてはその特徴を次のとおりまとめることができる。

- ① 玉縁は有段となる
- ② 幅は 13cm で、厚さ 2～2.5cm 前後である
- ③ 凸面の調整は、布目痕の上を縦方向に丁寧に磨く。ハケメを加える場合がある
- ④ 凹面の調整は、縦方向のケズリを行い、コビキ痕、布目痕、繩痕等は全く残さない
- ⑤ 胎土には石英粒を多く含む



1~5 富山城本丸採集の瓦（故林寺巣州氏採集品）



6 富山城本丸採集の軒平瓦（西井龍儀氏採集品）

7 大手町出土の滴水瓦
6,7は〔西井 2001〕より

これらの瓦の年代については瓦当面の文様が不明なため決定は困難である。一方造瓦技法からみると、織豊期以降の丸瓦の凹面に特徴的なコピキ痕が本資料では意図的にケズリ取られている。このようなケズリは現在まで織豊期以降の丸瓦には確認されないこと、また有段形式の玉縁についても織豊期以降の丸瓦にはあまり認められないことの2点から、これらの瓦を織豊期より新しいものとみなし、慶長期以降に位置づける西井説は妥当と考えたい。

しかしながら慶長期以降関連の深い金沢城においては、詳細は十分把握されていないが創建瓦と考えられている一群は織豊期の造瓦技法の系譜を踏襲しているようであり、その後においても富山城型式の丸瓦は出現していない。したがってこの富山城型丸瓦は、織豊期から近世城郭成立期のいずれにあってもきわめて特殊な一群といえる。その系譜や年代の解明は今後の検討を待たねばならない。

さて、西井氏が本丸東側石垣上から採集された軒平瓦（6）は、硬質でいぶしに光沢が認められる。文様は肉厚でしっかりした均整唐草文を配する。その子葉は各々が中心飾りから派生せず、1本の連続した流れをもつことが大きな特色である。このような特徴に近い唐草文は金沢城石川門盛土3〔石川県立埋文センター1998〕に少數認められるものの、その意匠はやや異なる。これらは寛政期以前のものとされるが、富山城の唐草文はしっかりと表現され、金沢城より古い印象を受ける。

7は富山市大手町（江戸期の旧二の丸跡内）から出土した釉薺瓦（富山市郷土博物館収蔵資料）は、倒三角形の形状を呈する軒平瓦で、滴水瓦と呼ばれる形式の瓦である。この瓦は主として城郭の主要建物に葺かれるもので、国内では27の城郭で確認されている〔中井1995〕。本例は梅鉢紋が配される家紋瓦で、瓦当面がほぼ直角に接合する後出的な要素を有する。二の丸の二階櫓御門あるいは本丸関連建物に葺かれていたことが考えられる。

以上富山城出土の古相を示す瓦について林寺資料を中心に概観したが、佐々成政から前田利長の在城した天正年間後期から慶長年間にかけての時期に確実に瓦葺建物があったかどうかは未だ不明である。今のところ、利長が行った慶長2年および慶長10年前後に行われたと推定される初期整備の際に石垣築造とともに瓦葺建物が導入されたという見方をしておきたい。

これらの瓦については先にも述べたが、造瓦技法において唯一ともいえる特殊なケズリ技法を用いている。この技法が製作の際に何らかの特殊な理由により突発的に行われたのか、あるいは富山城造瓦工人集団の特殊なクセであったのかはわからないが、富山城においては定着した技法として存在したことは確かである。この特殊なケズリ技法を施した丸瓦を「富山城型丸瓦」と呼び、近世初期頃における一指標として位置付けておきたい。

本報告にあたっては西井龍儀氏、上原真人氏、佐伯哲也氏より多くのご教示を得た。記してお礼申し上げます。

参考文献

- 石川県立埋蔵文化財センター 1998 『金沢城跡石川門前土橋（通称石川橋）発掘調査報告書Ⅱ』
上原真人 1984 「瓦の見方について」『富山市考古資料館紀要』第3号
齊藤朝子・高尾由美子・内山久子 1996 「富山城址採集の瓦について」『富山市考古資料館紀要』第15号
富山市教育委員会 2004 「富山城跡試掘確認調査報告書」
富山市郷土博物館 1994 「特別展 富山城の歴史展」
西井龍儀 2001 「富山県産瓦の変遷」「北陸の瓦の歩み」（社）日本セラミックス協会北陸支部
中井 均 1995 「滴水瓦に関する一考察」『織豊城郭』第2号 織豊期城郭研究会

大伴家持の歌に見る渡河地点について

藤田富士夫

(埋蔵文化財センター所長)

はじめに

古代越中国の河川の渡河地点について、『万葉集』にみえる次の歌が示唆的である。越中国守大伴家持が天平 20 年(748)の春先、出舉巡回の際に詠んだものである。

①蘿波郡の雄神川の辺にして作れる歌一首

雄神川紅にはふ少女らし葦附取ると瀬に立たすらし(巻 17-4021)

②婦負郡の鶴坂川の辺りにして作れる歌一首

鶴坂川渡る瀬多みこの吾が馬の足搔きの水に衣濡れにけり(巻 17-4022)

③鶴を潜くる人を見て作れる歌一首

婦負川の早き瀬ごとに籌さし八十件の緒は鶴川立ちけり(巻 17-4023)

④新川郡の延櫛川を渡りし時に作れる歌一首

立山の雪し消らしも延櫛の川の渡り瀬鎧浸かすも(巻 17-4024)

これらには①蘿波、②・③婦負、④新川の各郡を代表する河川の「セ」の様子が歌われている。②や④の歌には、「セ」が渡河地点であったことが示されている。

ここでは、古代渡河地点としての「セ」の箇所を疑似想定し、古代道路の敷設位置や作歌の心象風景について私考を述べたい。

セの情景

これらの歌には、いくつかのセの情景が見える。①には「瀬に立たすらし(瀬専多ミ須良之)」、②には「渡る瀬多み(和多流瀬於保美)」、③には「早き瀬ごとに(波夜伎瀬其等専)」、④には「川の渡り瀬(可波能和多理瀬)」と詠まれている。ここに読み下し文と原文を併記した。読み下し文では、セは一様に「瀬」と表現されているが、原文では「瀬」と「瀬」が使い分けられている。細やかな心象を詠み込んだ『万葉集』の文字の使い分けは、作者の感性とあいまって情景にふさわしい文字が充てられているとみるべきであろう。この点で、原文には読み下し文では味わえない微妙な情景の違いがうかがえる。

手近な、『明解漢和辞典(新版)』(三省堂 昭和 42 年)で調べてみた。【瀬】「ハヤセ。湍流ハヤイ→速ウズまき「一水」@ウズまく。湍湍。【瀬】「セ。川の、浅くて、流れが早いところ」とある。

①の歌では、「少女」が浅瀬に立っている情景に「瀬」が用いられている。「少女たちが『葦附(水松の一種)』を探るとして浅瀬に立っているらしい」とする場面である。素足の少女が立つことができる浅瀬である。深さ 20cm もあれば充分過ぎるほどの水音がサラサラ聞こえるような地点が想定できる。

一方、②鶴坂川や③婦負川、④延櫛川では、渡河地点に「瀬」が用いられている。特に②と④には家持が馬上にあって、渡河する情景が詠われている。②には「…吾が馬の足搔きの水に衣濡れにけり」とあり、④には「川の渡り瀬鎧浸かすも」とある。これによつて、「瀬」は「瀬」よりも深さのある文字表現であることが分かる。

家持は馬上で「瀬」の歌を詠んでいる。それはどのような場所なのであろうか。「藤原京、平安京以降の馬は、木曾馬相当の一三〇から一四〇センチメートル右内外の中形馬主体となる。しかし、平安時代でも東国(千葉県)では、小形馬が主体である」(松井章

「考古学から見た人と動物」『平成 15 年度秋季企画展 捕る 愛でる 押む一人と動物展一』新潟県立歴史博物館（平成 15 年）とされている。馬の生態に詳しい富山市埋蔵文化財センター近藤顯子学芸員のご教示によれば、家持がミヤコから愛馬を連れてきたとすれば体高 130~140cm 位の中形馬の可能性が高く、地面から鐘までの高さは約 70~80cm となるという。

「…浸かすも…」（巻 17-4024）は、「雪解けによる増水によって。ツカスは漬ける」とある。「瀬」の表現から、そこは豊かな水流が石列の表面をまたぎ白波を立てている場所であったようだ。そのような渡河地点にあって、「吾が馬の足搔きの水に衣濡れにけり」や「鰐漫かすも」と（たぶん誇張気味に）いった深部もあったとするのが現実的風景であろう。家持は、深い所では、“それ位もあったよ”といった文学的情景をかきたてられる場所を馬行したのである。

巡回に際しての渡河地点

②婦負郡の鶴坂川の辺りにして作れる歌一首

鶴坂川渡る瀬多みこの吾が馬の足搔きの水に衣濡れにけり（巻 17-4022）

③鶴を潜くる人を見て作れる歌一首

婦負川の早き瀬ごとに筈さし八十伴の緒は鶴川立ちけり（巻 17-4023）

④新川郡の延槻川を渡りし時に作れる歌一首

立山の雪し消らしも延槻の川の渡り瀬鰐漫かすも（巻 17-4024）

このように配置された歌の順序は、春巡回の経路を暗示している。②鶴坂川や③婦負川の現地比定は確定したものではないが、「渡る瀬多み」などの記載から、富山平野を流れる古・神通川へ諸説は充てている。

先に、筆者は「古代婦負郡の『郷』擬定と柄谷南遺跡の位置」（『富山市柄谷南遺跡調査報告書Ⅲ』富山市教育委員会 2002 年）を考証した中で、主要地方道富山・小杉線（旧・国道 359 号線）が神通川左岸の富山市有沢から右岸の布瀬へ抜けるルートを古代幹線道路に想定した。この地域には延喜式内社鶴坂神社が鎮座しており、②の歌の「鶴坂川」は、この近域に存在したとされている。対岸右岸には、自然地勢に由来すると思われる「布瀬」や「黒瀬」の地名がある。神通川河口から約 10km 上流に位置する当地には「瀬」にふさわしい河川景観が広がっている。写真 1 は、鶴坂神社のやや下流地点から東を望んだもので古代渡河地点の「瀬」の疑似情景を重ねて平成 16 年 2 月 18 日に撮影した。前面には、家持が神宿る山として賞賛した「立山」連峰（巻 17-4000、4001、4003、4004）が大パノラマを描いている。

神通川を渡って東行するには、もう一つ大きな河川を渡らなくてはならない。常願寺川である。この渡河地点は、左岸の富山市朝日から右岸の中新川郡立山町利田にかけての地域に存在したと私考している。常願寺川の河口から約 8 km 上流の地点である。ここに渡河箇所を比定するのは、古代の駅伝路（また駅路、郷道の重複道として）を一般県道蓮町・新庄線と重ねて想定しているからである。富山平野を斜方位直線道として計画的に敷設されたこの道路は、利田地内で神護景雲元年（767）成立の東大寺領越中国荘園「大荘莊」開田図に記された「從郡川枯往道」の放線先端へと連なっている。なお、ここでの大荘莊の現地比定は、私考によるものを用いている（『東大寺領大荘莊の現地比定と遺跡』『森浩一 70 の疑問 古代探求』中央公論社 1998 年）。「從郡川枯往道」は、「『郡』より『川枯』へ往く道」と解されている（藤井一二『東大寺開田図の研究』培書房 1997 年 302 頁）。「郡」は新川郡衙を指すという。この斜向道を北進すれば、9 km 余



写真1 神通川の擬似渡河地点



写真2 常願寺川の擬似渡河地点



写真3 片貝川の擬似渡河地点



で筆者が新川郡衙と想定している米田大覺遺跡へ往きつく。また、磐瀬駅と擬定している蓮町遺跡へと直結する。これらのことから、本道が古代の幹線道路と重なっているとみて、当地に渡河の疑似情景を想定した。ここでもやはり、無数の石むれが水流に洗われ白波を川面に描く景観を呈しており、渡河にふさわしい「瀬」地勢をなしている。写真2は、左岸から馬上で渡河する人の目線の高さを意識して2001年12月21日に撮影した。ここでも眼前に広がる「立山」が美しい。

次に、家持は、魚津市を流れる片貝川の情景を詠んでいる。

⑤片貝川の川の瀬清く行く水の絶ゆることなくあり通ひ見む(巻17-4002)

ここで「川の瀬清くは」、原文で「可波能瀬伎欲久」と書かれている。「瀬」地勢を示している。④新川郡の延櫛川を渡りし時に作れる歌一首にある「川の渡り瀬」の語感が示唆するように、「瀬」は郷域の人々が日常的に利用している渡河地点を表わしているとしてよいだろう。

片貝川にはほど近い中流左岸に延喜式内社建石勝神社がある。現在地より上流側に旧跡地の伝承地があり、そこに立石の地名があり、かつ川原石の「立石」が存在する(紙谷信雄『魚津の立石考』『富山市日本海文化研究所報』第29号 2002年)。立石には、駅路に關係するものがあるとする研究がある(木下雅康『古代の道路事情』吉川弘文館 2000年)。紙谷氏は、駅路とするには慎重さを示しつつ、「この旧社地の立石は片貝川を渡る、あるいは氾濫原を辿る一つのポイント、即ち渡河点を示す場所であった可能性が推定される」としている。同感である。

けだし家持が詠んだ「片貝川の川の瀬清く行く水の絶ゆることなく」の情景として、この土地はふさわしい。私は、「立石」が交通に関する地名遺称とみて、当地辺りに幹道の渡河地点を疑似想定しても良いと思っている。写真3は、そのような観点から2001年12月8日に、魚津市の立石・西尾崎地内の片貝川に架かる天神橋から上流を見すえて撮影した。その地は片貝川河口から約3.8km上流に位置する。当日は、雲に隠れて頂は望めなかつたが、晴天時には立山連峰が美しい。

おわりに

ここに「万葉集」の瀬・瀬を手がかりとして、その疑似情景の地を探索した。歌の「瀬」には渡河地点が比較的多く示されている。その地点は河川中流域に想定できそうである。大きな平野が展開する富山平野では河口から10km前後上流、平野の狭い片貝川流域では河口から4km前後の上流である。共通して河原石が散乱し、今日でも清流が石の瀬をこえて波立ち走る風景が展開している。そして、いずれも「立山」の眺望が格段に映える地なのである。家持の春巡行での歌は、川の瀬と立山の美しさとが重なった渡河地点で主に残されているようだ。登場する川は神宿る立山(巻17-4000, 4001, 4003, 4004)を源流としている。⑤の片貝川の歌(巻17-4002)は、立山を称える歌の間に挟まれている。切り離して見ているとわからないが、配列から見ればこの歌もまた「立山」を称えている。神宿る立山からの清流が、白波を立てそして水音として感受できる場所においてこそ家持の心の琴線がふるえたのである、とするのは穿ちすぎであろうか。

引用参考文献

中西進『万葉集 全訳注原文付(四)』講談社文庫 1983年

野垣好史

(埋蔵文化財センター学芸員)

1. 石器の概要

本資料は、今年度調査した開ヶ丘狐谷Ⅲ遺跡の縄文時代中期中葉の堅穴住居内より混入品として出土したものである。射水丘陵周辺では古沢A遺跡や向野池遺跡のように製品が単独で出土する例が多く、本遺跡の場合も同様の出土状況を示している。

本資料の石材は濃飛流紋岩もしくは頁岩で、斜行する縦長剥片を素材としている。左側縁の先端部側を斜めに整形加工しており、素材の形状を大きく変えてしまっているものとみられる。一側縁のみを加工しており、加工は腹面側からが主であるが、厚みがある部分では背面側からも行っている。打面は狭小で、調整を行わずに原石の分割面を打面にしているものと考えられる。

打面からの剥片剥離角は140度である。背面主剥離面の剥離方向に関して、図では基部側からの剥離として表現しているが、これは必ずしも明確でなく、先端部側から行われている可能性もある。もし後者の場合には腹面の剥離とは方向を逆転させて打撃を加えていることになる。また、連続微小剥離痕や光沢など使用痕が認められる。詳細については今年度刊行の報告書を参照頂きたい（富山市教委2004）。

2. ナイフ形石器の位置づけについて

本資料については、形態からみると茂呂系ナイフ形石器の範疇に含め得るような印象を受けるものの、北陸の茂呂系ナイフ形石器は二側縁加工による柳葉状と三角形の整形を主体とする（奥村1986）ことから、一側縁加工の本資料とは整形のうえで差異がある。また、先に述べたように背面と腹面で剥離の方向を逆にした両極打面の剥片とみた場合、東山型ナイフ形石器との関連が注目されることになる。ただし、これも大沢野町野沢A遺跡（大沢野町教委1982）や上市町眼目新遺跡（富山県1976）など県内の東山型ナイフ形石器の整形とは異なるように思われる。また不整形な縦長剥片を素材とする点において、福光町人母シモヤマ遺跡にみる小形ナイフ形石器との関連も考えられそうである。

本資料はこのように既出の石器群のなかでは捉えにくい特異なものであり、素直に系統や時期を決めがたい。筆者の勉強不足のため十分な検討が及んでいないこともあるかと思う。ここに資料の紹介を果たすことで、皆様からの御教示を得ることができれば幸いである。本稿作成にあたり麻柄一志氏、西井龍儀氏から御教示を受けた。記して御礼申し上げます。

参考文献

- 富山県 1976『富山県史』通史編 原始・古代1
- 大沢野町教育委員会 1982『野沢遺跡A 地点発掘調査報告書』
- 奥村吉信 1986『北陸にみる茂呂系石器群の性格』『旧石器考古学』33 旧石器文化談話会
- 富山市教育委員会 2004『開ヶ丘狐谷Ⅲ遺跡・開ヶ丘狐谷Ⅱ遺跡発掘調査報告書』

加藤達行

(埋蔵文化財センター所長代理)

平成 15 年度埋蔵文化財センターが実施した富山城跡試掘確認調査では、旧本丸部分に人為的に埋められた戦国期の堀跡が確認された。

天正 13 年(1583)間 8 月付の羽柴秀吉が本順寺にあてた書状によれば、秀吉は、越中に軍を進め木舟城、守山城、増山城を攻略すると、佐々成政は織田信雄の仲介を得て降伏した。このとき「墨衣体」とあることから、成政は剃髪して秀吉の陣におもむいている。秀吉は降伏を受け入れ、命は助け、成政等は大坂に連れ帰っている。成政の居城である「外山」に陣を進め、各城には諸将を配し、置目を定めた。そして富山城は「破却」を命じた。

秀吉は、成政には新川郡だけを安堵し、残り三郡は前田利長に与えた。「頼如上人貝塚御座所日記」に成政の処遇について「已來大坂ニ在城仕レ、別ノ知行可被下云々、則在大坂、越中忽國ヲハ前田孫四郎ニ被遣之」とあり、成政には別に知行が与えられ、越中国は孫四郎つまり利長の支配とされたという。しかし、天正 14 年 5 月の上杉景勝は上洛にあたって、魚津から岩瀬の途中、成政の使者の贈り物を受け取っていないが、成政の新川郡との関わりをうかがわせるが、同 15 年 10 月付の増田長盛等が安国寺惠瓊等に宛てた書状に肥後国を宛てられた経緯を上方で 1 万石を与えられていたが、「不便」に思われ、また、御用にたつことからと述べており、このことから新川郡は降伏後成政に与えられたが、成政の肥後移封以前にはすでに秀吉の直轄地とされ、実質支配は前田家に預けられたようである。

利長は三郡押領とともに守山城に移った。慶長 2 年(1596)、利長は守山は風が強いなどの理由から富山に居城を移し、このとき「新城を仕る」といわれている。これまで富山城は放置されたと思われる。同 4 年利長は金沢に移るが、同 10 年隠居して再び富山城を居城とする。このとき家臣の堀田平右衛門等宛書状に「普請繩張の間敷、並石の見積り、以目録被申越」とあり、富山城に石垣を積むこととしている。さらに、加能越文庫所蔵の正保絵図に近いものとされる「越中国富山古城絵図」に「本丸 南北三十五間、東西八十間、虎口は石垣(崩石垣高三間)、他は土居」とあり、現在残る石垣と本丸正面西ノ丸との境に延びる堀が描かれている。利長の普請が近世富山城に連なるものであることが想定される。

今回の試掘で確認された本丸中央部の堀は、この絵図には全く描かれていないことから利長の城普請以前のものとすべきであり、戦国期の堀跡で人為的に埋められたものとする考古学上の見解とも符合する。そして、このような大規模な人為的な埋め立ては秀吉の富山城の「破却」によるものとして差し支えないであろう。とすれば当然、成政の富山城は、現在地にあるが、前田氏時代とは違った構造であったと考えられる。

出典史料：富山県史 史料編近世上ほか

富山市教育委員会 埋蔵文化財センター所報
富山市の遺跡物語 第 5 号

平成 16 年 3 月 31 日

編集・発行 富山市教育委員会 埋蔵文化財センター
〒930-0803 富山市下新木町 5-12
TEL 076-442-4246 FAX 076-442-5810
URL <http://homepage2.nifty.com/kitadai/> (北代灘文広場と兼用)
E-mail maizoubunka-01@city.toyama.lg.jp
印刷 大栄印刷株式会社